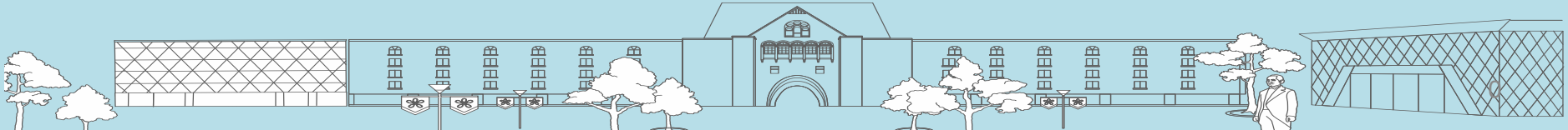
第25回図書館総合展「近畿大学中央図書館の学修支援」
2023年11月2日（木）14：00-15：30

情報リテラシー教育2020-2023

近畿大学中央図書館学生センター
レファレンス課
上野 芳重

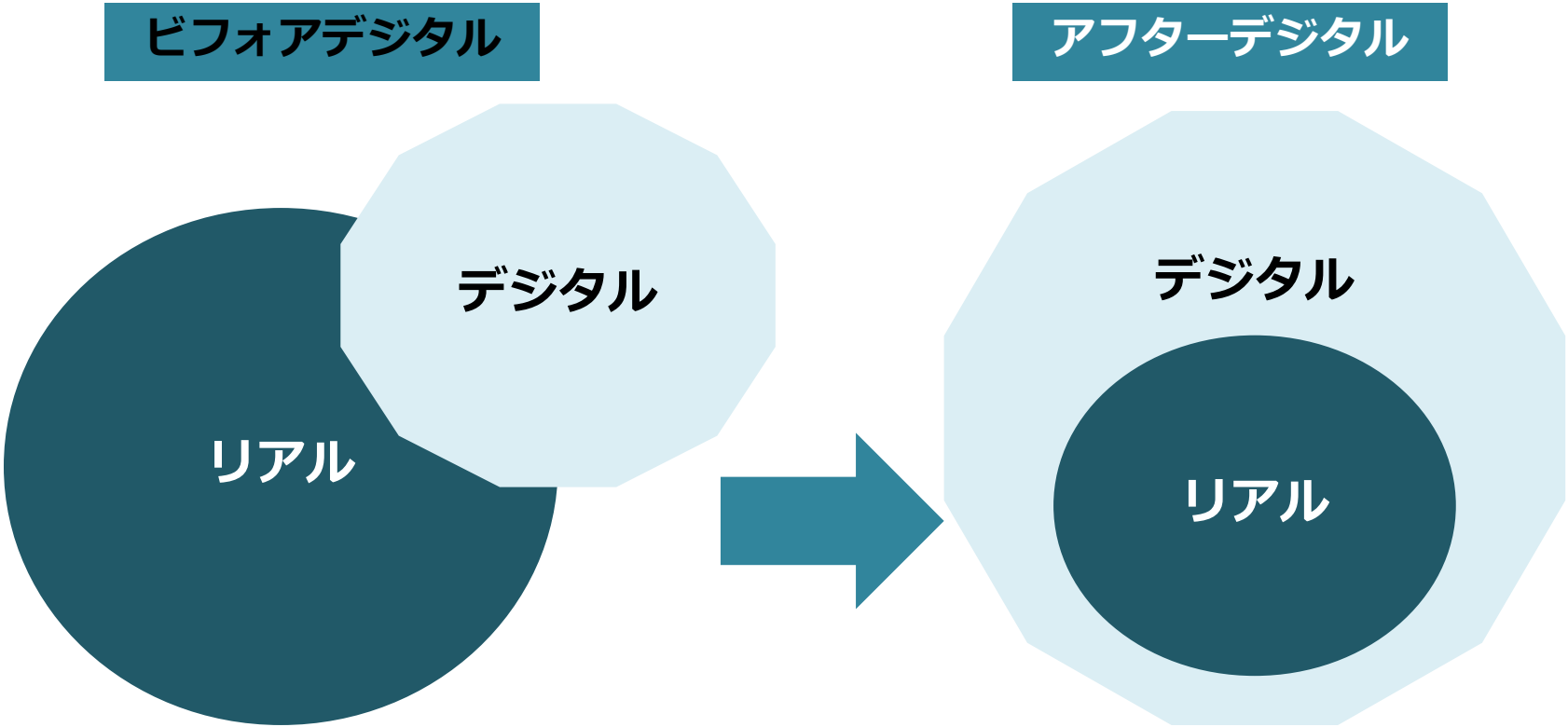


本日の内容

1. アフターデジタルとは
2. 近畿大学中央図書館のデジタル事情
3. 情報リテラシー教育2020-2023
4. 学修者本位の学修支援

1. アフターデジタルとは

アフターデジタルとは



藤井保文『UXと自由』(アフターデジタル;2)　日経BPマーケティング　2020.7　p.19　より発表者作成

実（サービス・空間）と情報（サービス・空間）の融合

- **リアルとデジタルの主従関係の逆転**
- リアルはこれまでよりも重要な役割となるが、頻度はレアとなる

- 「リアルチャネルにはより高い体験価値や感情価値が求められ、十分に強みを発揮すべきポイントになる」

藤井保文, 尾原和啓『オフラインのない時代に生き残る』 (アフターデジタル;[1])
日経BPマーケティング 2019.3, p.50

2.近畿大学中央図書館のデジタル事情

KINDAI UNIVERSITY

中央図書館概要：電子資料増

	2019年度	2022年度
蔵書冊数	約150万冊	約140万冊
所蔵雑誌タイトル数	約13,000種	**約11,000種 ↘**
電子ジャーナル数	約53,000誌	**約84,000誌 ↗**
開 館 日	年間324日	年間315日
入館者数	約180万人	**約128万人 ↘**
貸出冊数	約28万冊	**約16万冊 ↘**
電子ブック利用	約1.5万冊	**約13万冊 ↗**

※2022年度、契約電子ブックの提供冊数は、**約１万6千冊**。

KINDAI UNIVERSITY

中央図書館概要：電子資料増

	2019年度	2022年度
蔵書冊数	約[illegible]万冊	約140万冊
所蔵雑誌タイトル数	[illegible]	**約11,000種** ↘
電子ジャーナル数	[illegible]	**約84,000誌** ↗
開 館 日	[illegible]	年間315日
入館者数	[illegible]	**約128万人** ↘
貸出冊数	約2[illegible]冊	**約16万冊** ↘
電子ブック利用	約1.5[illegible]冊	**約13万冊** ↗

電子ブックは
蔵書の
約100分の1

※2022年度、契約電子ブックの提供冊数は、**約１万6千冊**。

KINDAI UNIVERSITY

中央図書館のデジタル事情

施設・機器環境

■学内Wifi
図書館内、学内校舎の
どこでも利用可能

■BYOD
PCも学生が持参、保有率高
スマホと併用

■PC教室：ビブリオシアター
貸与PC：中央図書館

資料

■電子ブック

■電子ジャーナル

■データベース

■学外利用サービス
（学認、RemoteXs）

■バーチャル書架

サービス

■オンラインレファレンス
（メール、Zoom）

■ガイダンス動画、
セミナー動画

■チャットボット
（Slackで提供）

■中央図書館HP
調べ方案内
（パスファインダー）

チャットボット開設（2022年10月～）

開館時間やデータベース
利用方法まで、いつでも
チャットボットで解決！

問い合わせ先：近畿大学中央図書館レファレンス係

- 本学の全学生・教職員が利用できるslackで実施。
- **本学全学部のチャットボット導入にあわせて中央図書館チャットボット開設**
- 内容はHPのFAQをもとに作成。

利用実績　※人数はのべ人数

	会話件数	利用人数
2022年度	6,760件	5,789人
2023年4月～9月	9,203件	8,352人

- 開館時間など定型的な質問が**24時間対応可能**に。
  見えなかった利用を可視化。

※有人対応は、今後の課題。

3.情報リテラシー教育2020-2023

学修支援：情報リテラシー教育/サービス

（1）図書館ガイダンス

- **対面式講習会から転換。動画を提供（2020年～）**
- **図書館利用の基礎的内容を提供。初年次教育から全学年対象に転換。**

（2）オンデマンド講習会

- **教員のオーダーに沿った**内容で実施。卒論、就活、主題DBなど。
- **対面、オンラインのハイブリッドな学修環境に対応**

（3）自由参加型セミナー

- **論文検索方法、本学契約DBのセミナーなどを実施。**
- オンライン開催から、**動画提供へ。今後、対面開催も検討中**

情報リテラシー教育：**組織的・段階的・継続的に**

教員との授業連携による実施

オンデマンド講習会
教員の要望・授業に合わせた内容
卒論・就活
動機があることで、学修成果高！

図書館ガイダンス：初年次教育
入学者全員の受講が目標
図書館の基本的な利用・サービスの理解
利用者（実際に使える人）へ導く

学生への提供

学修者自身が
必要な**支援を選択**

気づきを促す
働きかけが必要

（1）図書館ガイダンス
近畿大学限定公開YouTubeで動画公開

教員からの
１本の電話

「一番簡単な方法で提供してほしい。」

初年次教育授業との連携で視聴回数は安定。

しかし、授業カリキュラムに取り込めないと、どんなに良い動画も視聴されない。

KINDAI UNIVERSITY

動画一覧（2023年4月現在）

基本編

- 基本編
- 中央図書館利用案内
- OPAC（蔵書検索システム）
- 電子ブック（OPACから検索）
- 電子コンテンツ学外利用方法（RemoteXs）
- 日経テレコン（基本操作編）
- 剽窃しない引用作法

操作編

- 電子ブック（Maruzen eBook Library）
- 電子ブック（OverDrive)
- OPACから雑誌検索
- スマホで図書の予約・取寄せ・貸出延長
- 新聞記事の探し方
- CiNii Research
- 法情報データベース
- 理系データベース
- JapanKnowledge Lib
- リサーチ･ナビ紹介

セミナー編

- 20～60分の長時間動画を提供
- 教員連携により「レポートの書き方」動画を提供
- オンラインセミナーを動画として提供
- データベース各社担当者による動画

短時間の動画を中心に提供

セミナー編（15本）教員・DB各社・図書館員

教員	・レポート作成の超基本 ・レポート作成のための第一歩 ・実験レポートの書き方
DB企業各社	・Japan Knowledge Lib を使おう! ・日経テレコン(日経BP含む)基本編 ・日経テレコン(日経BP含む)就活編 ・eol 企業情報データベース基本編 ・eol 企業情報データベース就活編 ・JDream III利用者向け講習会 ・Factivaを用いた新聞記事検索　国内外の新聞・雑誌活用術 ・Factivaを用いた新聞記事検索　国内外の情報検索術
図書館員	・就活に役立つ企業情報の調べ方 ・レポート作成に役立つ資料の調べ方 ・Google検索スキルアップ！ ・統計情報 （入門編）

レポート作成支援
就活支援

データベース・
情報活用方法

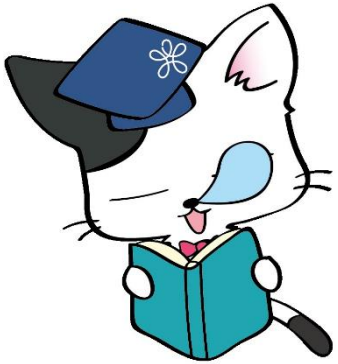
図書館ガイダンス：動画本数・再生回数

	2020 コロナ期	2021 コロナ期	2022 ハイブリッド期
動画　本数	15	19	↗ 31
動画：基本編　再生回数	5,476	4,732	↘ 2,466
動画：剽窃しない引用作法　再生回数	–	1,435	↗ 2,281
全動画　再生回数	27,966	33,437	↘ 21,577

各学部教務委員長へのヒアリングや、教員アンケートなどから、ブラッシュアップを続ける。→HP上の動画公開、教員連携による理系向けレポートの書き方動画提供を予定。

様々な工夫で動画視聴を効果的に：学修効果UP

動画だけだと
寝てしまう・・

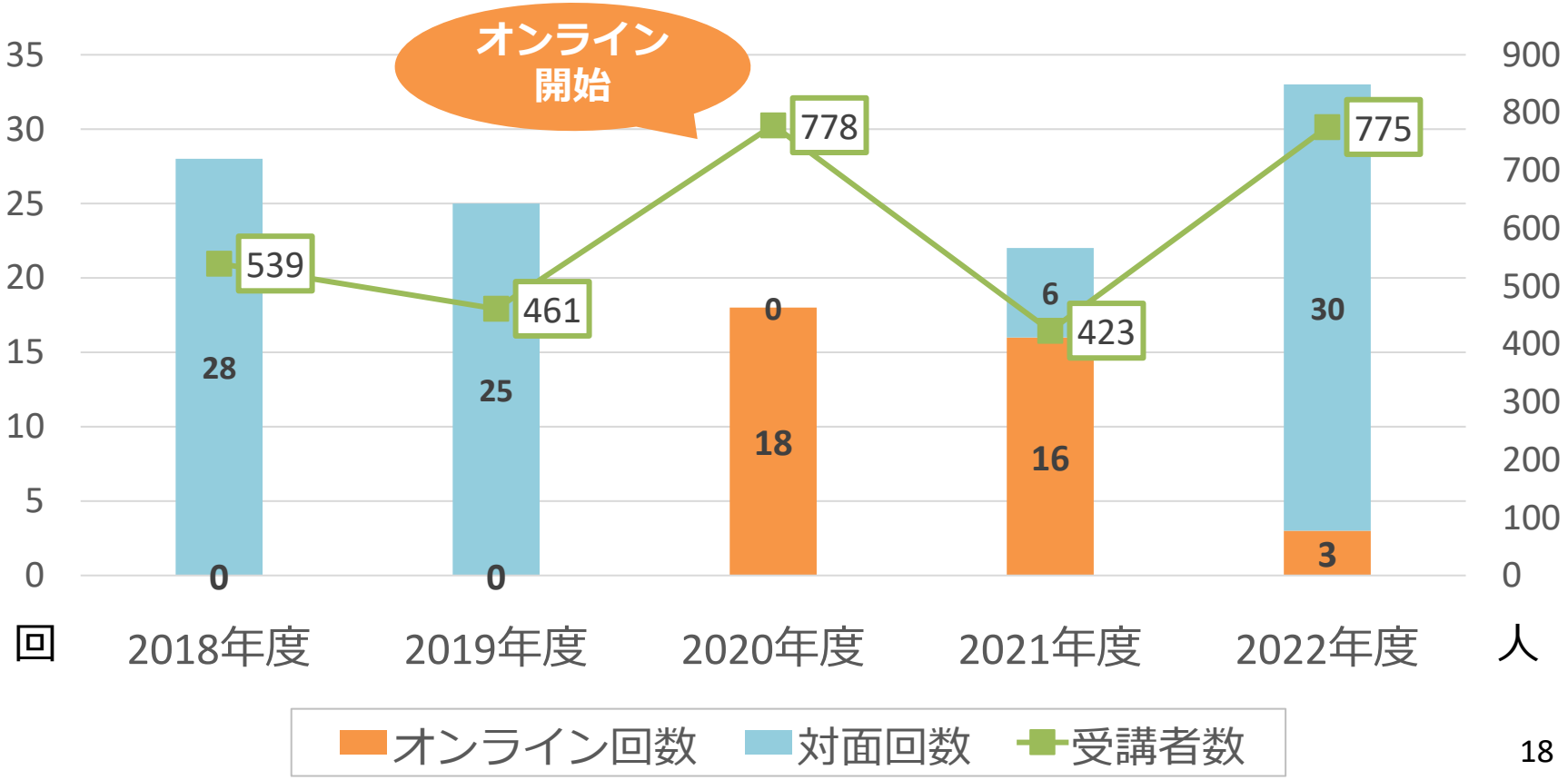


- 解説資料PDF（動画とセットで提供）
- **理解度テスト**（Googleフォーム）
- 剽窃チェックテスト（Googleフォーム）
- **検索課題**

①OPAC、日経テレコンの検索などPC演習
②図書館でミッションにチャレンジ
（図書館を実体験する課題）

※終了後に各学部・教員ごとの集計データも提供
※学生からの生の声をピックアップ

（2）オンデマンド（授業出張型）講習会



（2）オンデマンド講習会：事例紹介

理工学部　社会環境工学科「総合演習Ⅰ」（PBL科目 2年生学科必修授業）

- 2017年より**中央図書館と連携した授業**を展開。
- 授業5回目（2コマ）を**情報リテラシー演習**として、レファレンス課による**オンデマンド講習会**を実施
- 学生作成の文献調査票へコメントも行う（学生発表資料の連携）
- 2021年より、初年次教育で図書館ガイダンス動画視聴、理解度テスト実施。**1年次、2年次と継続した連携へ。**

図書館が授業全体に関わる

※参考　近畿大学シラバス　総合演習１
https://syllabus.itp.kindai.ac.jp/customer/Form/SY01010.aspx?syllabusno=2211500274
松井 一彰ほか「チームによる実践能力と情報リテラシーを向上させるPBL教育の試み」 工学教育 68 (6), 6_55-6_61, 2020
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsee/68/6/68_6_55/_pdf/-char/ja

事前事後テスト：学修者がどれくらい知識を得たか

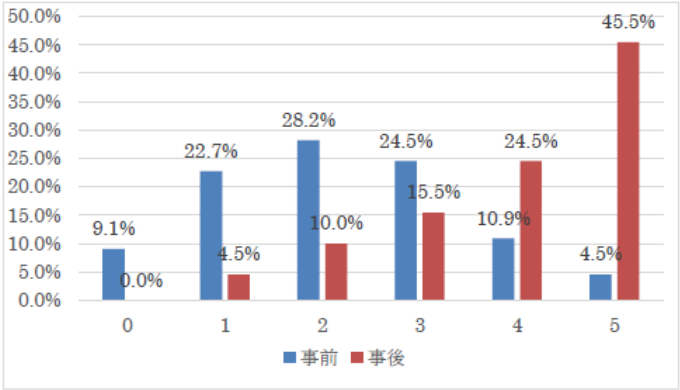
理工学部　社会環境工学科「総合演習Ⅰ」

図表 9-3　事前事後ミニテスト正答数　表（含む平均正答数）

正答数　集計

正答数／5問	事前		事後	
	比率（&）	人数（人）	比率（&）	人数（人）
0／5	9.1%	10	0.0%	0
1／5	22.7%	25	4.5%	5
2／5	28.2%	31	10.0%	11
3／5	24.5%	27	15.5%	17
4／5	10.9%	12	24.5%	27
5／5	4.5%	5	45.5%	50
計		110		110

図表 9-3　事前事後ミニテスト正答数　グラフ



全問正解（正当数5/5）事前テスト4.5% → 事後45.5%に増加
講習会によって知識が得られていることを検証できた

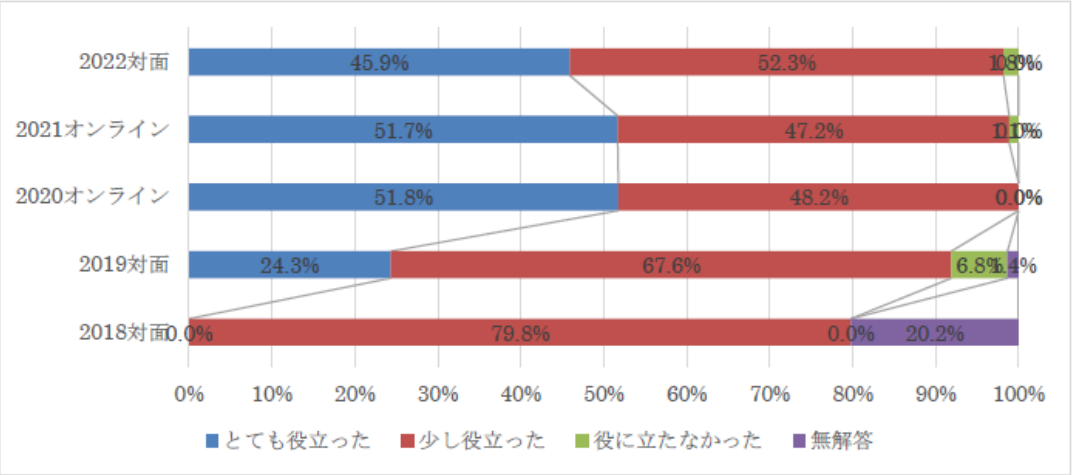
- 「2022年度理工学部社会環境工学科総合演習1-受講後アンケート集計報告」より抜粋
- 事前事後テストは、**講習会開始前、講習会終了後に同じ内容のテストを実施。**

授業後アンケート：学修成果の測定　1 関連性・動機付け

理工学部　社会環境工学科「総合演習Ⅰ」

長く学修に影響を
与えることを検証

図表 5-2　役立ったかどうか　経年比較



問

情報リテラシー演習は、その後の授業や学習に役に立ちましたか

答

受講者の約9割が役立ったと回答。うち約50%は「とても役立った」と評価。

- 「2022年度理工学部社会環境工学科総合演習1-受講後アンケート集計報告」より抜粋
- 授業後アンケートは、講習会実施日（5/2）ではなく、授業最終日（7/25）に行っている。

授業後アンケート：学修成果の測定　2 利用行動の変化

理工学部　社会環境工学科「総合演習Ⅰ」

図表 6-1　「役立ったこと」経年比較
（設問 8　図書館ガイダンス後、「これは役立った」と思うことがあればチェックしてください。（複数回答可））

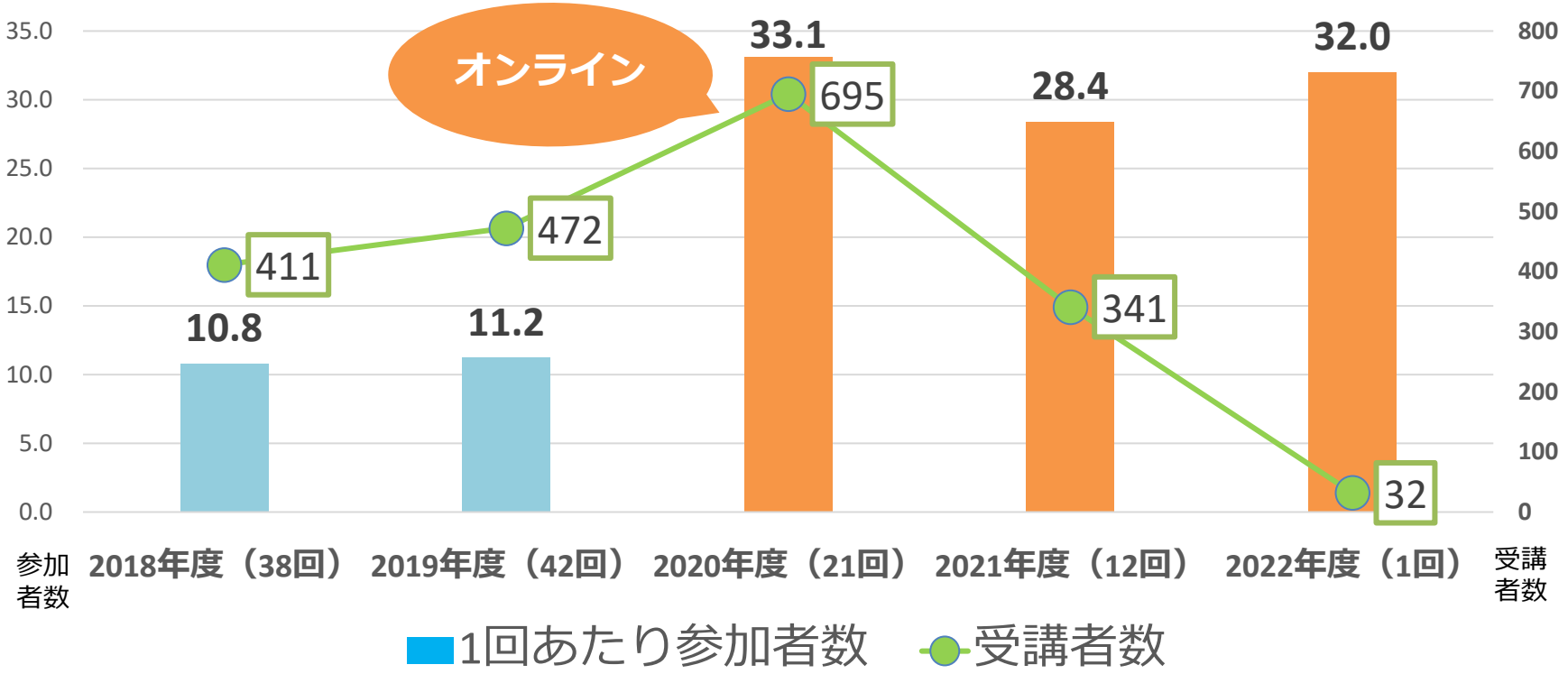
選択内容	2018(N=89) 対面		2019(N=74) 対面		2020(N=114) オンライン		2021(N=89) オンライン		2022(N=109) 対面		差分 (対2021)
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
図書館についてわかった	37	50.0%	35	39.3%	40	35.1%	30	33.7%	62	56.9%	23.2%
調べ方がわかった	50	67.6%	44	49.4%	89	78.1%	75	84.3%	74	67.9%	-16.4%
データベースについてわかった	27	36.5%	23	25.8%	58	50.9%	50	56.2%	62	56.9%	0.7%
学外からの電子コンテンツの利用方法がわかった					36	31.6%	32	36.0%	36	33.0%	-2.9%
雑誌についてわかった	9	12.2%	15	16.9%							0.0%
電子ブックについてわかった	23	31.1%	9	10.1%	15	13.2%	18	20.2%	20	18.3%	-1.9%
電子ジャーナルについてわかった	11	14.9%	29	10.1%	10	8.8%	14	15.7%	15	13.8%	-2.0%
論文についてわかった	23	31.1%	9	32.6%	35	30.7%	20	22.5%	27	24.8%	2.3%
OPACの使い方がわかった	30	40.5%	10	11.2%	58	50.9%	42	47.2%	46	42.2%	-5.0%
引用についてわかった	16	21.6%	7	7.9%	42	36.8%	36	40.4%	30	27.5%	-12.9%
参考文献の書き方がわかった	12	16.2%	11	12.4%	47	41.2%	33	37.1%	34	31.2%	-5.9%
統計についてわかった							8	9.0%	20	18.3%	9.4%
その他	0	0.0%	3	3.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0.0%
無回答	3	4.1%	18	24.3%	2	1.8%	1	1.1%	4	3.7%	2.5%

学修者の変化で
学修成果を測る

- 具体的に何に役立ったか、何がわかったかを測定。
- 「調べ方がわかった」が、経年比較でも最も高い。
- 対面時には、図書館へ直接出向く課題も実施。

（3）自由参加型セミナー

対面：集客の悩み→オンラインで参加増→オンタイムから動画→？？



※（）内はセミナーの実施回数

4.学修者本位の学修支援

図書館・情報リテラシーは不要なのか？

- 中教審「2040 年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」（2018）
  → **「図書館」も「情報リテラシー」も出てこない**

- **学修者本位**（答申）
  「学修者が「何を学び，身に付けることができるのか」を明確にし，**学修の成果**を学修者が**実感できる教育**を行うこと」

学生の学修成果、実感が高くなるのは？

KINDAI UNIVERSITY

学修者本位の情報リテラシー教育へ

デジタル	・**学修者自身が選択**できるプログラム提供 ・**利用するハードルが低い**サービス提供 （簡単なアクセス・充実した資料・気軽な相談） →**デジタルでできることは益々増大。**
リアル	・**授業・教員との連携強化** **（学修動機・学修機会）** ・手足を動かすプログラム提供 **（経験の獲得を促す→実感へ）**
融合	・「高等教育のための情報リテラシー能力基準」から**「枠組み」※**へ。**（専門領域・成果重視へ）** ・**学修成果の測定継続**

※参照：瀬戸口 誠 「『高等教育のための情報リテラシーの枠組み』の意義と課題」図書館界 71 (1), 36-45, 2019-05-01

ご清聴ありがとうございました